



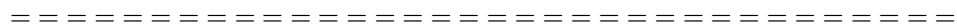
地域日本語支援ニュース こだま 第 254 号

2014.5.8



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

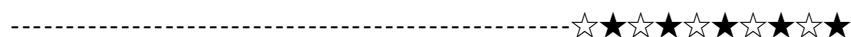


■ともに生きる■

違うということ

中野 敦

-----  
今回ご紹介する中野敦さんは、「こだま」252号でご登場いただいた韓国ご出身のキムソンウンさんと結婚されています。またことばを学ぶことを通し、青少年の国際交流・相互理解支援のお仕事に多忙を極める毎日と伺っています。そうしたなかで、外国人の伴侶と、ともに生きることへの思いを綴ってくださいました。



私たち夫婦は、結婚してからずっと別姓で、国籍も変えていません。不便なこともあるけれど、違いを大切にしたいと思っています。

人は、共感をもとめたり同じであることに安心したりします。そして、いわゆる日本人であれば無意識に同じであると思いついていたりします。そして、誤解したり、失望したりします。当然です。なぜなら、本来ひとりひとり違うんですから。外見だって、厳密にはことばだって違います。

劇作家で演出家の平田オリザ氏は講演会などで、電子レンジのことを「レンジ」と呼ぶ家で育った妻と、「チン」と呼ぶ家で育った夫の夫婦喧嘩を例に、「一人ひとりのことばの使い方の違い、あるいは一つのことばからうけるイメージ

の違い」が衝突する様を説明しています。相手と自分が同じであるという思い込みから生じる軋轢を紹介した私のお気に入りのエピソードです。

私たちには、互いのことばを学ぶというハードルはありましたが、上の例のような思い込みが少なく、誤解はあっても失望することはなかったように思います。違うことから出発して得られた共感や積み上げられた信頼は、同じであることを前提に築かれた関係よりも確かなものになりやすいのかもしれませんが。

また、自分のことは、なかなかわからないものですが、自分とは違う他者との出会いが、それまで知らなかった自分のことを教えてくれます。例えば、謙虚であることを無条件に美德と考えて人に対して何も言えなくなっているところに、自信を持って感じたままを表現することで得られる自己肯定感などは、気づきにくいものです。しかし、一旦、世界は多様であることを受け入れれば、逆に自分のことが見えてきます。そして、新しい視点も手に入れることができるのです。

育った国が違うことで違いを受け入れやすいのかもしれませんが、私にとって「共に生きる」ということは、そういう気づきと発見の毎日です。もちろん、難しいことだって色々ありますが、それに勝るとも劣らない魅力が違うということにはあると思っています。

---